

世界遺産「平泉」と価値のイメージ

佐 藤 嘉 広[※]

1 はじめに

「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」は、2011年（平成23年）世界遺産登録が実現した。2001年の暫定一覧表登載から、足掛け11年の歳月を要している。この間、2008年には、「平泉一浄土思想を基調とする文化的景観」が記載延期となるなど、記載に至る過程で、顕著な普遍的価値（以下、OUV）や構成資産の再構築が迫られてきた。これは、「世界遺産としての」平泉の価値をどのように見出し、説明しようとするのかについて模索し続けてきた過程でもある。

一方で、「研究対象としての」平泉は多様な素材を提供してきていて、それぞれの研究は一定の歴史的蓄積を有している。また、平泉は、古くから中尊寺金色堂や毛越寺浄土庭園を中心とした東北地方有数の観光地としても知られていて、毎年100万人程度の来訪者を迎えている。そのため、平泉は、「世界遺産」が話題となる以前から外部者に対して一定のイメージを与え続けていて、そのイメージは多彩であったとみられる。

本報告では、平泉の研究史と新聞報道を振り返りながら、世界遺産一覧表への記載（世界遺産登録）を目標として続けられた取組が、平泉のイメージにどのような影響を与えたか、また、与えた可能性があるかについて検討する。

2 「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の構成資産（図1）

「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」は、以下の5つのサイトによって構成されている。

①中尊寺：12世紀初頭、奥州藤原氏初代藤原清衡によって関山丘陵上に建立された。往時は40の寺塔と300の禅房があったとされる。境内全域が資産範囲であり、特に、唯一の現存建造物である金色堂、12世紀の部材を用いて再建されたとされる経蔵、後年、金色堂を保護するために建立された金色堂覆堂、そして平泉で最初の浄土庭園の可能性を持つ場所である大池伽藍跡によって、世界遺産としての価値が説明されている。

②毛越寺：12世紀中葉、奥州藤原氏二代藤原基衡によって現在の平泉中心域の南西部に建立された。往時は40の堂塔と500の禅房があったとされる。薬師如来を本尊とする金堂円隆寺の前面に園池（現

※ 岩手県教育委員会、岩手大学平泉文化研究センター



図1 「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群と関連遺跡群」の位置

在は大泉が池と呼ばれている）があり、背後の塔山とともに、浄土庭園を構成している。12世紀以来の建造物は考古学的遺構としてのみ残されているが、18世紀に再建された常行堂においては、浄土思想を想起させる芸能が演舞されている。

③観自在王院跡：12世紀中葉、基衡の夫人によって、現在の毛越寺境内の東に隣接して建立された。『吾妻鏡』には、毛越寺を構成する伽藍のひとつとして本寺院が記述されている。阿弥陀如来を本尊とした大小の阿弥陀堂跡の前面に復原園池（舞鶴池）があり、浄土庭園を構成している。庭園は、当時の作庭技術書である『作庭記』の内容をよく反映している。

④無量光院跡：12世紀後半、奥州藤原氏三代藤原秀衡によって建立された。境内は土塁によって囲まれている。中心伽藍は翼廊を持つ阿弥陀堂で、前面に園池（梵字池）を伴い、阿弥陀堂の西側背後遠方には金鶏山がそびえ、浄土庭園としての景観を創出している。当時の建造物はすべて失われ、考古学的遺構として残存している。

⑤金鶏山：現在の平泉中心域の西側に所在する標高98.6mの独立丘。山頂には12世紀に経塚が造営されている。浄土庭園の背後の山として焦点化するなど、平泉を計画的に造営していく際の基点とされている。

このほか、2006年に「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観」として推薦した構成資産の候補は、以下の遺跡等である。

柳之御所遺跡：奥州藤原氏の政庁・居館である「平泉館」の遺跡。11世紀末に清衡による造営が開始され、四代藤原泰衡によって放棄されるまで、その機能が継続した。

達谷窟：9世紀の建立とされる毘沙門堂と12世紀に造営された可能性を持つ園池とによって、浄土庭園としての空間が構成された可能性をもつ現存寺院。境内の西側に磨崖仏がみられる。

白鳥館遺跡：平泉の北、北上川の蛇行地点に形成された古代から中世後半まで長期間にわたって持続した遺跡。12世紀中葉以降には、川湊に特有の工房などが形成されている。

長者ヶ原廃寺跡：関山丘陵の北、衣川の左岸に造営された寺院跡で、10世紀末～11世紀中葉まで機能したと考えられている。本堂の礎石遺構や境内四周の土塁などが確認されている。

骨寺村荘園遺跡：奥州藤原氏及び鎌倉幕府によって安堵された中尊寺経蔵の荘園。13世紀～14世紀ごろの絵図が残され、そこに描かれた景観がそのまま今日に伝わっている。

3 平泉を対象とした学術研究の多面性

平泉は、文献史、美術史、建築史、考古学、庭園史など、さまざまな角度から研究が進められてきている。それを象徴的に示すのが、1950年の中尊寺総合学術調査であり、1952年の無量光院跡の発掘調査、そして、その後の平泉遺跡調査会による一連の調査である。

平泉の歴史をもっとも叙述的に説明する文献史では、鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』を中心とした研究が進められ、1950年代後半には高橋富雄（1921～2013）らにより『蝦夷史料』（1957）及び『奥州藤原史料』（1959）が集成され、また、岩手県教育委員会によって『奥州平泉文書』（1958、森嘉兵衛・板橋源ほか編）が刊行された。しかし、これらの集成資料を除いて12世紀の文字資料は極めて限定的であることから、最近では、発掘調査によって出土した文字資料が新たに注目されている。

美術史においては、1918年の『中尊寺大鑑』に始まり、現在、国宝等に指定されている美術工芸品や経典、仏像等の調査研究が継続的に行われてきている。

建築史においては、現存建造物が限られることから、藤島亥治郎（1899～2002）を中心とする平泉遺跡調査会による発掘調査が実施され、考古学的遺構から寺院伽藍に迫ろうとする研究が続けられた。一連の発掘調査の成果は、1980年代後半以降の考古学研究者による大規模な発掘調査へとつながるものである。

庭園史研究においては、建築史と同様に発掘調査に基づく研究が進められた。特に、無量光院跡や1959年の毛越寺境内の発掘調査から、いわゆる浄土庭園の具体的内容が少しずつ明らかにされた。さらに、1980年代の毛越寺庭園の修復・整備にともなう発掘調査において遣水遺構が確認されるなど、日本庭園史における大きな成果があった。

人類学的観点では、1950年の総合調査以後の際立った成果は認められないが、その際の成果が、現在の平泉及び北方史に対する見方に大きな影響を与え続けている。

さらに西行や芭蕉など著名な文学者の研究も、平泉のイメージ形成に役割を果たしてきた。

しかし、近年において平泉の学術研究に最大の影響を与えたのは、考古学的な発掘調査の成果である。特に、1988年に国道4号平泉バイパスの建設に伴う大規模な発掘調査が開始されると、それまでイメージされていた「寺院中心の」平泉観を一掃するような、括目すべき成果が相次いだ。発掘調査の大半は、文化財保護法に基づいた記録保存を前提とした調査ではあるが、柳之御所遺跡に代表されるように、失われたと考えられていた遺跡が鮮やかに蘇り、史跡に指定されて保存され、将来に伝えられる遺跡も複数出現した。また、柳之御所遺跡の保存運動は全国的な広がりとなり、平泉が世界遺産登録へと向かう重要な契機ともなった。

20世紀終盤の大規模な発掘調査の実施と継続は、多面的であった平泉の研究動向にも大きく影響したとみられる。1989年から2015年までの26年間に公表された平泉関係の研究論文タイトルの構

成について見ることによって、平泉に対する研究者の関心がどのような点にあったかが確認できる。岩手県教育委員会が公開しているホームページ「古都平泉の文化遺産」(注1)から、この間に公開された学術研究論文(学術的単行本を含む)645件について、それぞれの標題をキーワードごとに集約し、その構成比率を検討した。(図2)

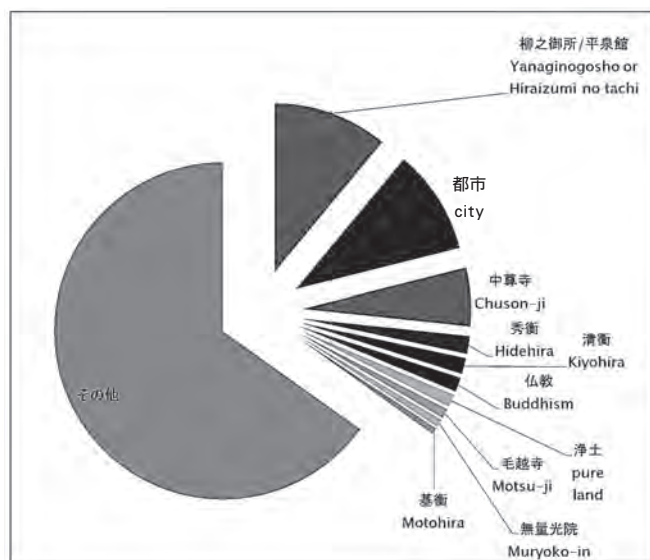


図2 平泉を対象とした学術研究645件のテーマ別構成比(1989~2015)
(岩手県教育委員会ウェブサイト「古都平泉の文化遺産」により作成)

これより、柳之御所遺跡の大規模発掘調査が学術研究に与えた影響が確認され、また、「都市」の用語が高い割合を占めることは、平泉が全国的な研究者の関心を引き起こしたことがうかがえる。平泉の研究が膨大な考古学的資料の増加に対応して活発化したという、研究活動に一般的な状況を見ることができる。

ここで注目したいのは、「浄土」である。8件(1.2%)が該当している。

4 世界遺産暫定一覧表以後の平泉イメージの形成

(1) 世界遺産暫定一覧表の記載内容

このような研究動向のなかで、2001年には、「平泉の文化遺産」(Cultural Heritage of Hiraizumi)が世界遺産暫定一覧表に記載された。その内容は、平泉の特徴的な価値を羅列的に述べたものである。

平泉は、

- ・独特の黄金文化
- ・12世紀の北方当地の拠点(京都と並んで極めて高い文化的水準)
- ・浄土の姿をこの世に体現した日本独特の浄土建築と庭園の典型的な遺跡群
- ・住宅の建築と庭園の遺跡(柳之御所遺跡)
- ・藤原三代のミイラを納めた中尊寺金色堂
- ・都市的構造を示す関連遺跡群も極めて良好に遺存
- ・環境にもよく当時の雰囲気を残している

1 <http://www2.pref.iwate.jp/~hp0909/koto/sankou/bunken/bunken.htm>

などの記述がみられる。

これらの内容をベースとして、2006年に推薦書を作成・提出し、2008年の世界遺産登録に向かうことになるが、平泉のOUVを証明する作業は、上記のどの項目を重点化して説明していくかという議論の繰り返しであった。すなわち、暫定一覧表の段階においては、平泉の価値がなお多面的（複線的）に考えられていたことを示している。このことは、当時の学術研究の動向とも共通している。

（2）一般県民の平泉イメージ

次に、学術的観点から離れて、平泉が一般県民の間でどのようにイメージされていたかについて検討する。この作業は、本来、県民アンケートなどの手法によって行われるべきものであるが、そのような調査結果が知られていないことから、代替的な方法として、岩手県内において最大部数（20万部、注2）を発行している「岩手日報」紙上において、平泉がどのように報じてられているか、主題別に分析することとする。

記事データは、岩手県立図書館が公開しているデータベース（注3）を利用した。データの期間は、1993年1月～2016年7月までの23年6か月間である。全体で1,862件のデータについて、12のキーワードを設定し分析した。（図3）

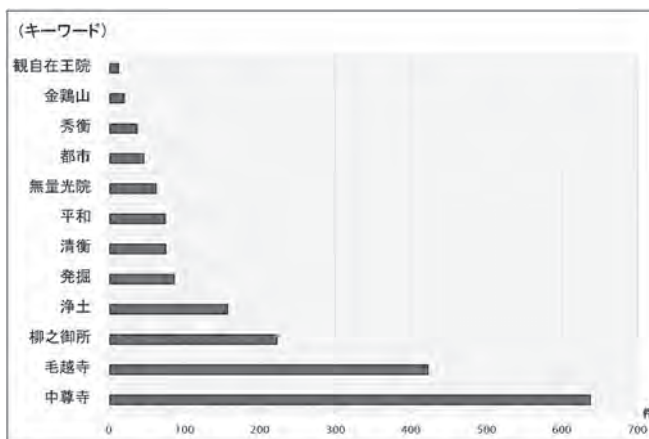


図3 岩手日報に掲載された平泉関係の記事（主題別）（1993.1～2016.7）
（岩手県立図書館が公開している岩手日報記事のデータベースにより作成）

この間、「中尊寺」と「毛越寺」が圧倒的に多いのは、両寺の年中行事が毎年同じ記事として繰り返されることも大きな理由である。「柳之御所」は200件を超え、大規模発掘以後の学術的動向がそのまま反映している。一方で、「都市」については65件で、新聞記事にはなりにくい性質を有していると考えている。

これらの記事を1件ごとに、その性質によって「研究／学芸」、「文化財」、「観光」、「地域／教育」、「世界遺産」に5分類した。この分類から、例えば、「都市」の主題は「研究／学芸」に、「柳之御所」は「研究と文化財」に、「毛越寺」は「観光と地域／教育」に、そして「浄土」は「世界遺産」の区分に頻度が多いことがわかる。（図4）

さらに、1993年から4年単位で記事の頻度を見た場合、2005年～2012年までの8年間は、他の期間の1.5倍以上の度数を示している。この増加が、主に「世界遺産」関係の増加によるものであることが明らかである。（図5）

ここで注意したいのは、「浄土」、「清衡」、「平和」などのキーワードである。「世界遺産」が新聞

2 http://www.iwate-np.co.jp/bosyu/saiyo_gaiyo.html

3 <https://www.library.pref.iwate.jp/iliswing/>

network/page/We_tosyokan_riyo/jsp/Refkensaku.jsp?siori=1003&fmode=0

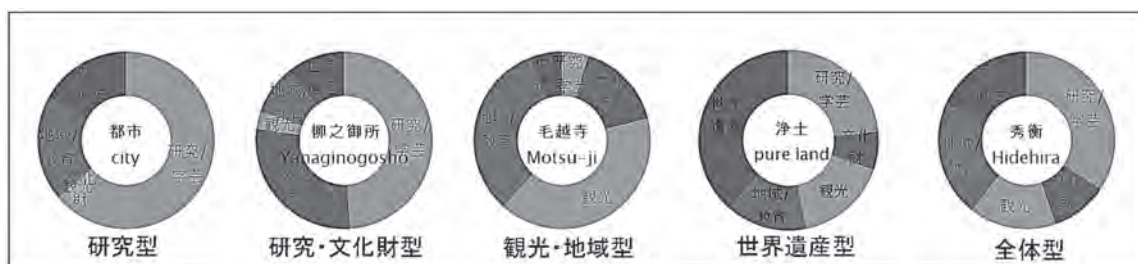


図4 岩手日報紙に掲載された平泉関係記事内容の分類（元データは図3と同じ）

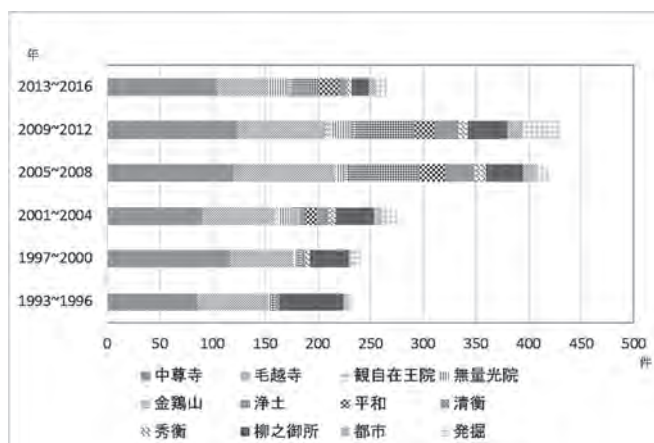


図5 岩手日報紙に掲載された平泉関係記事の主題別経年変化（元データは図3と同じ）

報道に与えた影響については、一定期間ごとのキーワード別頻度の推移によっても明らかであるが、特に、「浄土」や「平和」などは、2001年の暫定リスト記載以後に顕著となるもので、それ以前にはほとんど記事化されていない。この二つの単語が、世界遺産登録を目指す過程において、それまでの平泉への視点とは別に出現したものであることがわかる。

2006年12月に、推薦書「平泉－浄土思想を基調とする文化的景観」がユネスコへ提出されるが、その中心的主題が「浄土（思想）」であった。同年6月に一関市で開催された国際会議の結論が、推薦書のコンセプトが「浄土」へ収斂していく過程に大きく反映する。間近に迫った推薦書の提出に向け、「平泉」の価値を画一的に表現する必要に迫られていたことが、話題性をさらに高めたことも影響したとみられる。

5 世界遺産が学術研究及び書籍の刊行等へ与えた影響

世界遺産登録機運の上昇に伴い、「浄土（思想）」は、学術研究や書籍の刊行にも波及している。学術研究においては、暫定一覧表記載以後、「浄土」をテーマとする研究が新たに出現している（図6）。それまでとは異なった研究テーマ設定であり、研究の方向である。

また、岩手県内の中央図書館的機能を有している岩手県立図書館（盛岡市）における平泉関連図書の受入状況を見た場合、1990年前後の柳之御所遺跡の発掘調査に対応して増加した後、いったん受入が縮小するものの、2001年以降再び急激に増加している（図7）。「浄土」をテーマとした書籍の受入を含め、この増加傾向は、明らかに世界遺産登録への動きと連動しているとみることができる。

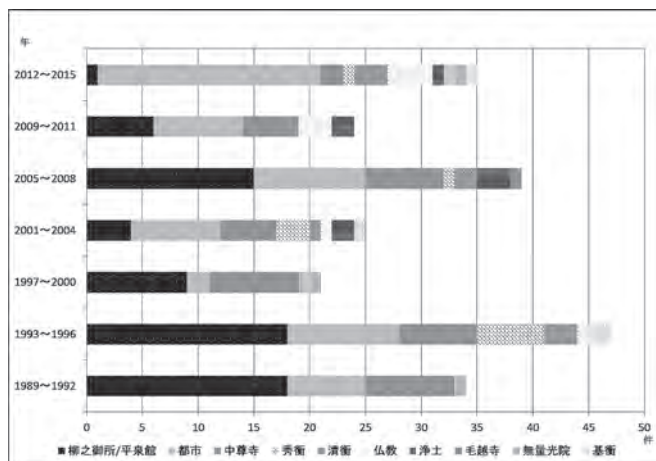


図6 平泉を対象とした学術研究テーマの経年変化
(1989~2015) (元データは図2と同じ)

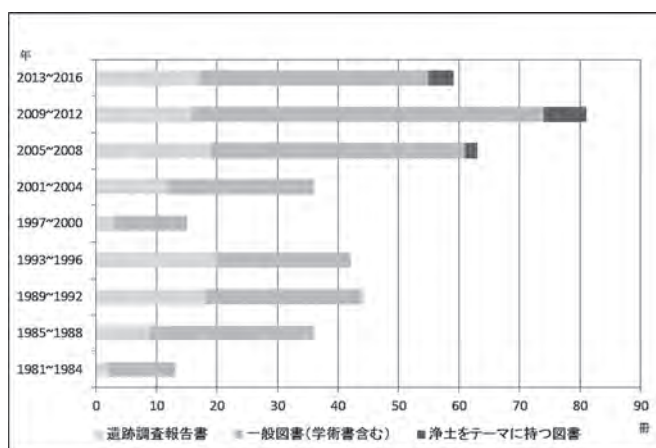


図7 岩手県立図書館における平泉関連図書受入数の
経年変化
(岩手県立図書館のウェブサイトにより作成)

それは、単に一施設への受入冊数の増加としてみるべきではなく、世界遺産登録の機運上昇と軌を一にした平泉関連書籍の刊行の増加であったとみるのが妥当であろう。

上記の傾向は、2001年を前後して刊行された大矢邦宣（1944～2014）の2著作に顕著に反映される。氏は、岩手県立博物館学芸員を経て盛岡大学教授を務め、同時に、世界遺産推薦書を作成・検討するために設置された「平泉の文化遺産世界遺産推薦書作成委員会」の委員を担うなど、岩手県における平泉文化の代表的有識者として知られていた。

氏の代表的著作に、『奥州藤原氏五代』（2001.7、産経新聞社）と『平泉 自然美の浄土』（2008.8、里文出版）がある。同一研究者によるこれらの著作を比較検討することで、世界遺産の推薦コンセプトが氏の研究活動にどのように影響したか、如実に理解することができる。前著においては、全編を通じてわずからか所のみに記述される「浄土」は、後著においては52箇所で記述されている。同一対象を題材としながらも、重要なキーワードの出現頻度が大きく異なることは、「世界遺産の価値」とされるものの与える影響の大きさを示している。

このように「浄土」が重用される傾向からさらに発展して、「平和」というキーワードまでが創出されている。それは、しばしば、奥州藤原氏が平泉を造営した理念として引用される「中尊寺建立供養願文」の記事を土台としている。

表1 「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の顕著な普遍的価値の言明

Brief synthesis

The four Pure Land gardens of Hiraizumi, three focused on the sacred mountain Mount Kinkeisan, exemplify a fusion between the ideals of Pure Land Buddhism and indigenous Japanese concepts relating to the relationship between gardens, water and the surrounding landscape. Two gardens are reconstructed, with many details recovered from excavations, and two remain buried. The short-lived city of Hiraizumi was the political and administrative centre of the northern realm of Japan in the 11th and 12th century and rivalled Kyoto, politically and commercially. The four gardens were built by the Ôshû Fujiwara family, the northern branch of the ruling clan, as symbolic manifestations of the Buddhist Pure Land on this earth, a vision of paradise translated into reality through the careful disposition of temples in relation to ponds, trees and the peaks of Mount Kinkeisan. The heavily gilded temple of Chûson-ji - the only one remaining from the 12th century -, reflects the great wealth of the ruling clan.

Much of the area was destroyed in 1189 when the city lost its political and administrative status. Such was the spectacular rise and conspicuous wealth of Hiraizumi and its equally rapid and dramatic fall, that it became the source of inspiration for many poets. In 1689, Matsuo Basho, the Haiku poet, wrote: "Three generations of glory vanished in the space of a dream...". The four temple complexes of this once great centre with their Pure Land gardens, a notable surviving 12th century temple, and their relationship with the sacred Mount Kinkeisan are an exceptional group that reflect the wealth and power of Hiraizumi, and a unique concept of planning and garden design that influenced gardens and temples in other cities in Japan.

Criterion (ii): The temples and Pure Land gardens of Hiraizumi demonstrate in a remarkable way how the concepts of garden construction introduced from Asia along with Buddhism evolved on the basis of Japan's ancient nature worship, Shintoism, and eventually developed into a concept of planning and garden design that was unique to Japan. The gardens and temples of Hiraizumi influenced those in other cities, notably Kamakura where one of the temples was based on Chûson-ji.

Criterion (vi): The Pure Land Gardens of Hiraizumi clearly reflect the diffusion of Buddhism over south-east Asia and the specific and unique fusion of Buddhism with Japan's indigenous ethos of nature worship and ideas of Amida's Pure Land of Utmost Bliss. The remains of the complex of temples and gardens in Hiraizumi are symbolic manifestations of the Buddhist Pure Land on this earth.

（文化庁仮訳）

摘要

平泉の4つの浄土庭園は、そのうちの3つが神聖な山である「金鶏山」に焦点を合わせており、浄土思想の理想と、庭園・水・周辺景観の結びつきに関する日本古来の概念との融合を例証している。浄土庭園のうちの2つは、発掘調査により発見された多くの詳細事項に基づき復元されたものであり、他の2つは地下に埋蔵されたまま残されている。短命であった平泉の都市は、11世紀～12世紀の日本列島北部領域における政治・行政上の拠点を成し、政治的・経済的に京都と拮抗していた。4つの庭園は、当時の支配氏族の北部地域における分家であった奥州藤原氏により、現世における仏国土（浄土）の象徴的な表現、つまり池泉・樹林・金鶏山頂と関連して仏堂を周到に配置することにより実体化した理想郷の光景として造営された。重厚に金箔を貼った中尊寺の仏堂は、12世紀から残る唯一のものであり、支配氏族の巨大な富を反映している。

平泉の大半は、政治・行政上の地位を失った1189年に滅んだ。それは、平泉のめざましい繁栄と顕著な富を表すと同時に、その急速で劇的な没落を示すものでもあり、多くの詩歌を喚起する素材となった。1689年に俳人の松尾芭蕉は、「三代の栄耀一睡のうちにして…」と詠った。このかつての巨大な（政治・行政上の）拠点に存在し、浄土庭園、12世紀から残存する顕著な仏堂、神聖なる金鶏山との関係を伴う4つの寺院仏堂の複合体は、平泉の財力を反映する類い希なる集合であり、日本の他の都市の仏堂や庭園にも影響を与えた計画・庭園の意匠設計に関する概念を表している。

評価基準(ii)

平泉の寺院と浄土庭園は、仏教とともにアジアからもたらされた作庭の概念が、日本独特の自然信仰である神道に基づきどのように進化を遂げ、結果的にそれが日本に独特の計画の概念及び庭園の意匠設計の概念へとどのように発展を遂げたのかを顕著に明示している。平泉の庭園と仏堂は、その他の都市の庭園・仏堂にも影響を与え、特に鎌倉には中尊寺に基づく仏堂のひとつが存在した。

評価基準(vi)

平泉の文化遺産は、東南アジアへの仏教の普及、日本に固有の自然信仰の精神及び阿弥陀如来の極楽浄土思想と仏教との明確で、独特の融合を疑いなく反映している。平泉の仏堂と庭園の複合体から成る遺跡群は、現世における仏国土（浄土）の象徴的な顕現である。

右、一音所覃千界不限、抜苦與樂、普皆平等、
官軍夷虜之死事、古來幾多、毛羽鱗介之受屠、
過現無量、精魂皆去他方界、朽骨猶為此土之塵、
每鐘聲之動地、令冤靈導淨利矣

(『奥州藤原史料』679より)

「浄土(思想)」と「平和」は、本来まったく異なる概念であることから、「平和」が、世界遺産のなかで顕著な普遍的価値に関わる「浄土」と同列に扱われる理由には乏しい。また、上記の資料から直接平和思想を読み取れるのかについては、議論があるように思われる。しかし、図5に明らかなように、2001年以降、特に「世界遺産」と「観光」の側面において「平和」が記事化されるようになる。その傾向は、「浄土」が単なる「観光」的記事から、「研究／学芸」や「世界遺産」の記事に“昇格”する時期と一致する。

また、「平和」は、2011年6月に、平泉が世界遺産一覧表に記載された後においても、そのまま平泉イメージの命脈を保ち、現在に至っている。参考までに、「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」のOUV及び評価基準を掲げておく。(表1)

6 まとめ

最後に、世界遺産登録がもたらした平泉イメージをまとめ、今後の課題について触れる。

多面性、多様性を帯びていた平泉への視角は、1980年代後半における柳之御所遺跡の大規模な発掘調査を経て、2001年の世界遺産への取組開始以降、それまでほとんど顧みられることのなかった「浄土」や「平和」といった新たなイメージが出現し、重視される傾向が強まった。また、「浄土」から派生したと考えられる「平和」については、ICOMOSや世界遺産委員会が評価した世界遺産平泉の価値とは異なる次元のものである。

今後、我々には世界遺産としての平泉を確実に後世に伝えていく責務があるが、そのために、平泉の何が評価され、価値を保つために何を保護していかなければならないかについて、関係者間で確実に意識を共有する必要がある。それは、時々の流行によって報道されるものとは異なっていると考え

参考文献

岩手県教育委員会 2013『平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—』岩手県
東北大学東北文化研究会編 1959『奥州藤原史料』吉川弘文館